

*庭師？世界を歩く＜イギリス編＞

2008年5月21日～6月2日、今回は、本場のイギリス式庭園（English garden, English park）を、直接、この目で観ることのできる、憧れのイギリスです。ご存じのように、イギリス式庭園は、何世紀にもわたって英国人が作り育ててきた西洋風の庭園様式の一つ。狭義では、平面幾何学式庭園（フランス式庭園）に対して自然の景観美を追求した、広大な苑池から構成される風景式庭園。今では、植物の自然な成長を活かしながら生活空間に美しく溶け込ませる庭づくりが日本でも人気が高まり、いわゆる「イングリッシュガーデン」として一般に愛好されているようです。

スコットランドの中部、北海に面したアバディーンから始まり、ネッシーが棲むというネス湖の街、スコットランド北部のインヴァネスへ・・・ここから南のロンドンまで、北から南にバスで巡る旅です。

* 第1日目（5月21日）

5月20日（火）成田前泊。5月21日（水）、成田13：20発のブリティッシュ・エアウェイズで、ヒースロー空港（イングランド）乗継、アバディーン空港（スコットランド）着21：50（現地時間）。

ヒースロー空港への着陸直前、思わず、一つの城が目に入ってきました。後で調べたところ、ウインザー城でした。左手の、屋上が白く丸い建造物、この城の最初の建造物があったところだそうです。最初は木造、その後石造りに・・・今でも、城の中心。従って、写真はウインザー城の東半分と広大な庭園の一部です・・・女王エリザベス2世が週末に過ごす場所でもあり、現存する城で人が住むものとしては最大のものだそうです。日本との時差は・・・5月は夏時間の期間なので-8時間。



写真上：ウインザー城（機内にて）

* 第2日目（5月22日）

今日は、アバディーンからネッシーが棲むというネス湖の街、インヴァネスへ・・・途中、インヴァネス近くのコーダ城へ・・・コーダ城は、シェイクスピアの名作「マクベス」の舞台となった城。ハイランドで一番美しい城とも・・・

出発する前、ホテルの駐車場で見かけました。あれ？サクラ？サクランボ？アーモンド？と思いつつ、近寄って観るとサクラの仲間のような感じでした。思いか



写真上左：サクラ（バラ科サクラ属／アバディーンにて）



写真上右：ヤブテマリ（スイカズラ科ガマズミ属／コーダ城にて）

けない遭遇でした。アバディーンは花崗岩の産地だそうで、花崗岩の街とも・・・。

コーダ城で、珍しい花を見かけました。ヤブテマリだと思いますが・・・。オオデマリの原種とも・・・。



写真上左 / 写真上右：コーダ城

写真下左：インヴァネス城

写真下右：インヴァネスの町並み



インヴァネス到着後、市内散策中に見かけた城と町並み。ちなみに、インヴァネスは「ネス川の河口」を意味し、ネス川の流域に広がった街。写真の川がネス川。

* **第3日目 (5月23日)**

今日は、午前、ネス湖を遊覧した後、インヴァネスを経て、スコッチウイスキーの街、ピトロッホリー経由でエディンバラへの移動・・・。

ネッシーとの遭遇を期待？しつつ、乗船。途中、前方に黒い物体が・・・。流木でした。ネス湖畔のアーカート城を臨んだ所でUターン。5月下旬とはいえ、曇天、時折小雨のためか、少々寒いクルージングでした。



写真上：ネス湖畔のアーカート城(遊覧船にて)

ピトロッホリー、夏目漱石の「ロンドン塔」にも登場・・・。ピトロッホリーは小さな田舎町ですが、週末や夏には休暇を過ごす人で賑うリゾート地だそうです。そしてスコッチウィスキーの産地の一つです。



写真上左：ピトロッホリー郊外にて
写真上右：エドラドゥーラ蒸留所
写真右：ピトロッホリーの街並み

途中、車窓からの眺めです。スコットランドらしい？風景・・・。今回は、イギリス国内で一番小さな蒸留所と言われているエドラドゥーラ蒸留所を訪れました。ここで試飲したかどうか、定かではありませんが、たぶん・・・。

この町には、最も古いベルズ・ブレア・アーソル蒸留所も有るそうです。市内のレストランでの昼食後、エディンバラへの移動です。

エディンバラ郊外、フォース湾に懸かるユネスコ世界文化遺産(2015年)のフォース鉄道橋です。その巨大な姿は「鋼鉄の怪物」と呼ばれ、いつまでたっても終わらないことを例えて「フォース橋にペンキを塗る」"Painting the Forth bridge" という言回しがあるそうです。フォース橋はその頑健な構造とメンテナンスのおかげで完成後100年以上たった現在でも現役。

日本では、大阪の港大橋(1974年開通)が、類似の構造を持つ橋。港大橋は、道路橋ですが・・・。



写真上：フォース鉄道橋
(フォース道路橋にて)

* 第4日目 (5月24日)

今日は、ユネスコ世界文化遺産(1995年)の街、溶岩の上に造られた街、エディンバラの市内観光です。エディンバラの地名は「エドウィンの城」から。で、エドウィンですが・・・。7世紀初頭にスコットランド

南東部に侵攻したノーザンブリア王エドウィンの名前。



写真上左：エディンバラ城(プリンセス通りにて)
写真上右：エディンバラ城正面ゲート
写真右：カールトンヒルにて



写真上：戦没者祈念堂
写真下左：宮殿
写真下右：城内

～エディンバラ城内にて～

正面ゲート前広場では、ミリタリー・タトゥーの準備が進められていました。

ホルロードハウス宮殿は、スコットランドにおける英国王室の宮殿。王室がスコットランドを訪問する際、滞在される場所だそうです。エディンバラ城からホルロードハウス宮殿を結ぶ、長さ1マイル(約1.6km)の石畳の1本道がロイヤル・マイルと呼ばれ、スコットランド有数の歴史地区だそうです。





写真上左：ホルロードハウス宮殿

写真上右：国立スコットランド美術館前にて

写真右：エディンバラ城からニュータウン

* 第5日目（5月25日）

今日は、エディンバラから風光明媚な湖水地方へ・・・。
スコットランドからイングランド北部、ロマン派の詩人ワグワースの街グラスミアへ。作品を読まれた方も多いかと。

ダヴ・コテージ。ワグワースの最盛期の作品の多くが書かれた場所だそうです。

今日の宿泊は、ウィンダミア湖畔の街、ボウネスです。



写真上左：ダヴ・コテージ / 写真上右：グラスミアの町並み

* 第6日目（5月26日）

今日は、湖水地方、ウィンダミア湖畔周遊です。

ホテルから歩いて数分のボウネス・ピアから船でウィンダミア湖南端のレイクサイドへ・・・。そして、ハバ



写真上左：宿泊ホテル / 写真上右：ホテル部屋からウインダミア湖
写真下左：レストラン / 写真下右：レストランテラスからウインダミア湖



ースウェイトまで、蒸気機関車での旅。ニア・ソーリーのレストランで昼食。そしてヒル・トップへ。

宿泊ホテルの中庭、すべて芝。若干のアップダウン変化がありましたが、周囲の景観とマッチした、落ち着いた雰囲気を醸し出していました。

ニア・ソーリーで立ち寄ったレストラン。三段のテラスと植栽の前方は、ウインダミア湖まで視界の開けた芝庭。天気もよく、食後の昼寝でもしたいよ



写真上：ヒル・トップ
写真左：ヒル・トップの農家にて

うな気持ちの良い空間でした。

ヒル・トップ。ベアトリクス・ポーターのピーター・ラビットの原点と言われている所。16歳のポーターが、バカンスで訪れた時、飼っていた兎の名前がピーターだそうです。彼女の物語の挿絵の背景が、ニア・ソーリー村。77歳でなくなるまで、ここに住んでいたそうです。静かで、落ち着いた田園風景が広がっていました。

最後に、ホークスヘッドへ・・・。ここにはベアトリクス・ポーター・ギャラリーと、ワーズワースゆかりのワーズ・ワースグラマースクールのある街です。農家の白い花は、フジの仲間です。白は、初めて観ました。

* 第7日目 (5月27日)

今日は、湖水地方を離れてチェスターへ・・・。途中、ブロンテ姉妹が「嵐が丘」、「ジェーン・エア」など、英国文学史に偉大な足跡を残した街、ハワースへ寄り道。



写真上：ムーア(荒野)

写真左：ムーアに至るウォーキングロード

写真下左：ハワースのメインストリート

写真下中：ブロンテ博物館

写真下右：ハワース・パリティッシュ教会



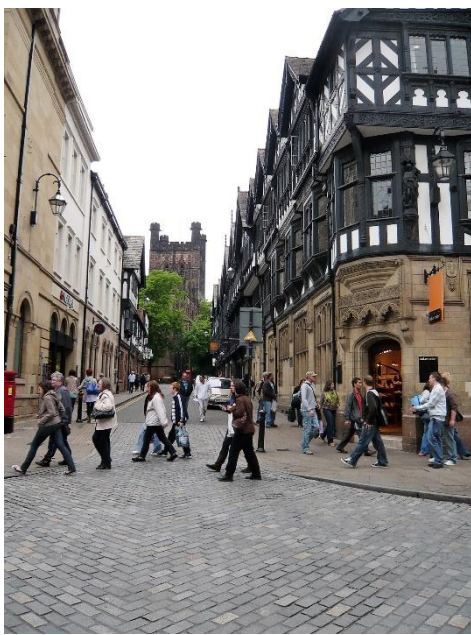
到着した頃から、生憎の空模様。小雨に濡れた石畳もまた、綺麗。風情が有りました。博物館は、教会のすぐ近く、ブロンテー家が、40年ほど住んでいた家で1779年に建てられたものだそうです。

ムーア(荒野)に至る小道は、緑豊かな雰囲気でしたが、ここを抜けたとたん、目に入った風景は、本当に、荒涼とした、吹きすさぶ風(嵐)を想像するに十分な所でした。

今日の最後は、旧市街が城壁で囲まれた街、チェスター。城壁の上を歩いて一周できるようですが、小生は約1/4を・・・

旧市街散策中に観られた、木組みの家です。旧市街では、石造りの建物が多いい中で・・・

チェスター大聖堂の中庭と外庭です。教会の中庭は、よく見かけますが、外庭は珍しいのでは？しかも、



写真上左：チェスター旧市街の町並み

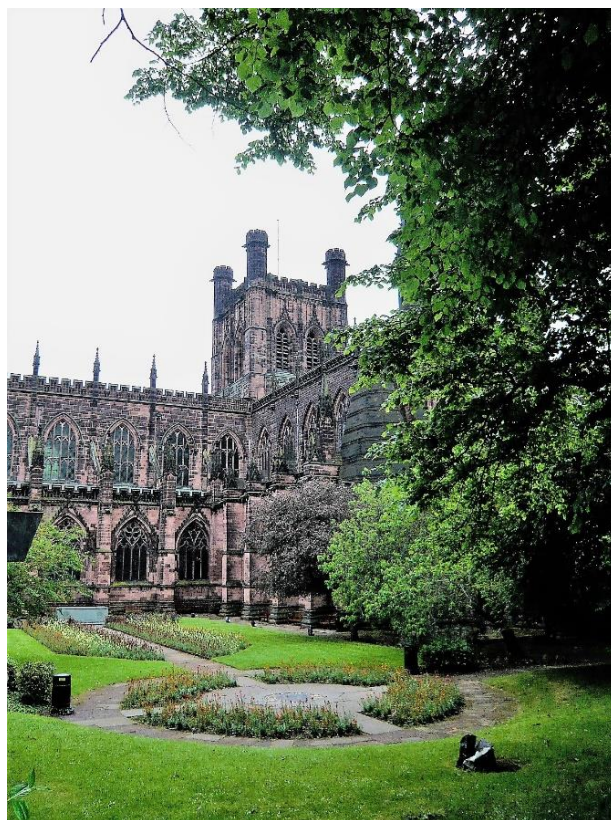
写真上右：チェスターの市庁舎



写真上：チェスター大聖堂中庭

写真右：大聖堂外庭

よく整備されている庭は・・・。教会の敷地内には変わりありませんが・・・。写真からは、内庭のように見えますが、通りに面した外庭です。



* 第8日目 (5月28日)

今日は、ウェールズ北部の観光です。コンウィ近郊のコンウィ溪谷にあるボトナントガーデンも訪れました。

ボトナントガーデンは数ある美しいイギリス式庭園の中でも最も美しいガーデンのひとつと言われているそうです。このガーデンの創始者はヴィクトリア朝時代(19世紀後半)の科学者ですが、実際に造園したのは娘さんだそうです。

コンウィ川に面した斜面に5段のテラスで構成されたスケールの大きな庭園です。

山あり、谷あり、小さな滝に趣のある木造の



写真上：カントリーホールとオールドパーク



写真上左：テラスガーデンにて

写真上右：カントリーホール

(テラスガーデンにて)

写真右：ボーダーガーデンにて



橋まであって、館周辺を離れるとまるでハイキング感覚で観賞することができました。

今は、ナショナルトラストが管理。ナショナルトラストは、後世に残したい貴重な自然遺産・文化遺産を守るために市民からの寄付の募集や関係機関への働きかけ、保全活動等を進めている市民団体。英国で最も多くの私有地を所有しているそうです。また、ここはジャクナゲのナショナル・コレクションにも認定されているそうです。

この庭園には、芝庭を中心とした庭(オールドパーク)、花畑を中心とした庭(テラスガーデンとボーダーガーデン)および自然の丘や谷をそのまま取り入れた庭(デルガーデン)の4種類が広大な敷地に配置されていま

した。オールドパークは、最もイギリスを代表する景観だと思います。デルガーデンは自然を生かした、木々に覆われた森。キツネが顔を出しそうでした。

入園して、最初に驚いたのが、長さ 55mのキングサリ(マメ科キングサリ属)のトンネル。ちょうど最盛期に訪れたようです。ボトナントガーデンの目玉の一つ。

黄色いフジが咲いている！！と感激。近寄ってみると、花はフジに酷似。でも「エッ、樹幹が違うし、蔓もない。これなんって名前？」と不思議がっていると、同行の熟女？曰く、「キングサリですよ。ご存じないの？東京では見かけますよ」と少し、小馬鹿にされたようでした。さらに「亀井戸天神のフジもおよばないわよ」と付け加えてくれました。ともかく、初めて出会った花でした。生憎の雨模様でしたが、オツなものでした。表示には「Laburnum」ラブルヌムと・・・。

帰国後、周囲に注意してみると、確かにありました。チョコっとですが・・・。小生の顧客庭では皆無。店頭にも苗木はありました。興味？のない時は何を見ても頭を素通り・・・。先日、緑友会の10周年記念行事で訪れた鳥取花回廊でも、小規模ですが見られました。

別名、キバナフジ、ゴールデン・チェーン。マメ科のキングサリ属の落葉樹。マメ科ラブルヌム属と表記している資料もありました。ヨーロッパでは一般的にみられる花木で、冷涼な気候の土地では大木に育つそうです。キングサリには全体にアルカロイドが含まれており有毒植物とされています。同じマメ科のエニシダとは近縁。ちなみに、フジはマメ科フジ属のツル性落葉樹。

品種には、一番多く栽培されているアナギロイデス、園芸品種が多いアウレウム、樹形がまとまっているエレクト、枝が垂れ下がるペンドゥルムなどがあるそうです。寒さには強いものの、高温多湿がやや苦手、日当たりがよく、水はけがよい場所に植えると良いそうです。



写真上：キングサリ(マメ科キングサリ属)

別名 キバナフジ、ゴールデン・チェーン



写真上左 / 写真上右：デルガーデンにて

デルガーデン。シャクナゲの咲くナチュラルガーデン。滝や木橋のある溪谷の雰囲気・・・。この流れは、上部のオールドパークから、コンウィ川まで・・・。

散策中に見かけた植物です。

チャイブ。見るからに、ネギ？花はネギ坊主そっくりですが、球形。ネギ坊主より花らしい花。薬味として使用されているアサツキは日本原産。チャイブの変種だそうです。カロテンを豊富に含む緑黄色野菜で、ネギと同じ匂いが・・・。西洋料理では、日本のネギのように使われているそうです。実際に見たことも食べたこともありませんが・・・。ひょっとすれば知らないうちに口にしていたかも・・・。

ルピナス。雨に濡れたルピナスは綺麗でした。ニュージーランドでもアチコチで見かけた花です。勿論、日本でも見かけますが・・・。

なにせ、高温多湿に弱いため、管理が大変ですが・・・。別名、ノボリフジ。フジの花が下から上に向かって咲いているような姿から来たそうです。

ルピナスという名前はラテン語で狼を意味するループスに由来。やせた土地でも堂々と侵入し、土地を荒廃させる植物と考えられおり、それを狼に重ね合わせたためとされていますが、はっきりした根拠はないそうです。が、たしかにノルウェイやニュージーランド(南島)は、もともと、氷河に覆われていた場所柄、痩せた土地が広がっている地域です。岩盤が剥きだしの景観を目にします。北欧の美しい緑の森も、わずかな土の上に生育しているそうです。一方では、ルピナスの豆は苦く、噛んだ人が苦虫を噛み潰したような表情になることが、その根拠であるという説も・・・。花後に枯れる一年草もしくは二年草、毎年花を咲かせる多年草、低木になる種があるそうで、基本的に高温多湿に弱く、園芸では多年草タイプのも的一年草として扱うことが多いそうです。秋にタネをまいて翌年(もしくは翌々年)に花を楽しむ秋まき一年草(二年草)として栽培するのが一般的だそうです。

オオデマリは、日本原産のヤブテマリの園芸品種。原種は花序の周辺にだけ装飾花をつけるますが、改良によって花序の花すべてが装飾



写真上：チャイブ(ユリ科ネギ属)



写真上：ルピナス(マメ科ルピナス属)

写真下：オオデマリ(スイカズラ科カマズミ属)



花となったものだそうです。

ボトナントガーデンの近くにあるコンウィ城。コンウィは、13世紀に築かれた城壁に取囲まれた街。ユネスコ世界文化遺産(1986年)。コンウィ城は、街の入り口にありました。イギリスの城塞のなかでも、最も保存状態の良い城塞の一つだとか・・・。残念ですが、今回は外観のみ・・・。近くのレストランで昼食です。

カナーヴォン城。ユネスコ世界文化遺産(1986年)。ウェールズ北西端に位置しています。ウェールズで最大かつ最強の城だったそうです。皇太子の称号「プリンス・オブ・ウェールズ」発祥の城だそうで、1969年にチャールズ皇太子の就任式が行われた城。



写真上：コンウィ城

写真左：カナーヴォン城にて

写真下左：鷲の塔からインナー・ウォード

写真下右：セイオント川からのカナーヴォン城



写真下：ストラフォード・アポン・エイヴォンの町並み

* 第9日目 (5月29日)

今日は、チェスターからイングランド中部の街、シェイクスピアの故郷、ストラフォード・アポン・エイヴォンへ・・・。

ストラフォードとは、古英語で“street”を意味する stræt と河を渡る道を示す ford(フォード(川)(英語版))の組み合わせに由来するそうです。その “street”とはフォッシーの道(英



語版) とイクニールド街道 (英語版) というローマ街道のこと・・・。

ロイヤル・シェイクスピア・シアター、シェイクスピアの生家やニュー・プレイスをはじめとするシェイクスピアゆかりの家々が保存・公開されています。近郊の村ショッターリーにシェイクスピアの妻アン・ハサウェイのコテージもあります。今回は、生家とアン・ハサウェイのコテージを訪れ、ニュー・プレイスは垣根の外から・・・。

コテージは結婚前にアン・ハサウェイが住んでいたとされる家。木骨造がよく見える造りで、典型的なチューダー様式の民家だそうです。

コテージの庭は、イングリッシュガーデンの雰囲気溢れる庭です。よく手入れがされていて、心地よい庭でした。これだけ多くの種類と、数を管理するには、大変な



写真上：アン・ハサウェイのコテージ
写真下左 / 写真下右コテージの庭



苦労が・・・。とても、個人が一人で管理するとなると、よほどの覚悟？が・・・と思いつつ、散策させていただきました。絵本画家・挿絵画家そして園芸家のターシャ・デューダーさんを思い出しました。

ニュー・プレイス。シェイクスピア最後の居住地で 1616 年に亡くなった場所だそうです。現在、建物は残



写真上左：ニュー・プレイス / 写真上右：シェイクスピアの生家

っていませんが、土台は残っているそうです。跡地は、英国ルネッサンス期様式で造られたノット・ガーデン様式の庭園になっているそうです。

ノット・ガーデン様式(結び目花壇)とは、ツゲや矮性植物を使って結び目模様を描き、その間に草花を植えた花壇のことで、チューダー様式の庭の一つだそうです。

* 第10日目 (5月30日)

今日は、イングランドでも屈指の美しさを誇ると言われているカントリーサイド、コッツウォルズ地方に出かけます。コッツウォルズは特別自然景観地域に指定されています。コッツウォルズの街を彩るのは、この地方で採れる石灰岩(ライムストーン)。ここで採れる石灰岩は、コッツウォルズストーンと呼ばれ、北東部ではハチミツ色、中部では黄金色、南西に下がるにしたがって、柔らかい白色に変化するそうです。

最初に訪れたのは、パイブリー。村内には14世紀に造られたアーリントン・ロウが・・・。低い屋根と切妻壁の家並みは、コッツウォルズ・スタイルの象徴だそうです。中世に建てられたコテージは、修道院のウール



写真上 / 写真右：アーリントン・ロウ

写真下右：パイブリーにて

写真下左：タニウツギ

(スイカズラ科タニウツギ属/パイブリーにて)



倉庫として、その後 17 世紀に、織物工が住むコテージに・・・。コテージの壁だけでなく、屋根もこの地方で採掘されるコッツウォルズストーンの花崗岩の石造り。現在、コテージはイギリス文化財第 1 級建造物として登録され、歴史的建築物の保護団体であるナショナルトラストにより管理されているそうです。村全体が、古きイングランドの雰囲気を残しているようでした。イギリスで一番美しい村とも・・・。

次に訪れたのは、コッツウォルズのベニスとも言われるポートン・オンザ・ウォーター。川と橋と町並みがマッチした美しい町でした。村全体をミニチュア複製したモデル・ビレッジもありました。入園すると、まるで、ガリバーの世界のようでした。建物の壁の色、ハチミツ色です。コッツウォルズストーンが使われているようです。



写真左 / 写真上：ウィンドラッシュ川
写真下：ポートン・オンザ・ウォーターの町並み

今日の最後は、ロウアー・スローター。かつて、チャールズ皇太子と故ダイアナ妃が訪れた村。静かな田舎町でした。

ロウアー・スローター、実際は・・・。アイ川沿いの村スローターは、上流部のアッパー・スローターと下流部のロウアー・スローターに分かれており、私たちが訪れたロウアー・スローターは「水車の村」です。スローターという意味は古語で湿地を意味するそうです。散策中に偶然、見かけた水車。この水車小屋が建てられたのは 11 世紀だそうです。水車は昔と相変わらず、回り続けていました。

ウマノアシガタ。チャールズ皇太子と故ダイアナ妃が歩いたと言われている野原の中の小道、アッパー・スローターへ続くフットパスの傍で見つけました。掌状の 3-5 裂した葉を持ち、黄色の可愛い花を咲かせていました。お二人が歩かれた際、気付かれたのでしょうか？





写真上：ロウアー・スローターの風景

写真右：水車と水車小屋

写真下：ウマノアシガタ

(キンポウゲ科キンポウゲ属)



写真の中の大葉に似た葉は別の植物です。ところで、ウマノアシガタはキンポウゲ科に多い有毒植物のひとつで、これを食べた牛が中毒を起こしたことがあるそうです。ウマノアシガタの八重咲きがキンポウゲです。

散策後は、マナー・ハウスでアフタヌーンティーを楽しみました。ところで、マナー・ハウスとは？中世ヨーロッパにおける荘園(マナー)で、地主の荘園領主が建設した邸宅のこと。マナーの語源はマンション(mansion)と同一、どちらも領主などが「滞在する」という意味のラテン語から派生した言葉だそうです。中世以降のカントリー・ハウスとほぼ同義ですが、マナー・ハウスは、やや下級に位置する貴族が所有する邸宅。中世封建制下、領土管理機構の最小単位としての役割があったそうです。



現代では、小規模から中規模の田舎の邸宅の名称として使用されることも……。かつての所有者が邸宅としている場合や、著名人のマナー・ハウスは博物館として公開されることもあるそうです。また、開発業者が買い取り、高級リゾート施設や保養地の宿泊施設としている場合も……。

現代では、小規模から中規模の田舎の邸宅の名称として使用されることも……。かつての所有者が邸宅としている場合や、著名人のマナー・ハウスは博物館として公開されることもあるそうです。また、開発業者が買い取り、高級リゾート施設や保養地の宿泊施設としている場合も……。

我々が利用したザ・スローターズ・マナーハウスは、17世紀のマナー・ハウスを利用したホテルだそうです。ハウスの前庭は、広い芝庭。ここでいただくことも出きるようですが、今回はハウス内で……。普段、目にする機会の少ない、落ち着いた調度品を観賞することができました。



写真上左 / 写真上右：ザ・スローターズ・マナーハウス
写真右：アフタヌーンティーのメニュー

* 第11日目 (5月31日)

今日は、コッツウォルズを離れ、首都ロンドンへ・・・。まずは、ロンドン郊外のキュー・ガーデンズへ・・・。

キュー・ガーデンズ。正式名はキュー王立植物園。1759年に宮殿併設の庭園として始まり、今では世界で最も有名な植物園として膨大な資料を保有。往時のキュー・ガーデンズは、世界各地から資源植物(人間生活に必要なものを作ることができるとされた植物)を集め、品種改良などを行う場でもあったそうです。現在、4万種以上の植物が育てられ、植物の標本は700万点以上だそうです。広さは約1200ヘクタール。

国立の植物園となったのは、1840年。2003年にユネスコ世界文化遺産に登録。新種の発見などに貢献している植物園です。

パームハウス。キュー・ガーデン



写真上：キュー・ガーデンズの大温室パームハウス

ズの目玉的存在。世界中から集められた熱帯植物が、大陸別に植えられています。



キュー・ガーデンズにて



写真左：カイズカイクキの盆栽

また、この植物園には、小規模でしたが、盆栽を展示している盆栽ハウスも有りました。カイズ

カイブキの盆栽です。

この他、日本庭園も有るそうです。京都西本願寺勅使門の1/5レプリカや岡崎市の茅葺き民家も・・・。茅はイギリスの葦と麦わら。日本で解体後、キュー・ガーデンズに移築。枠組みは日本人大工が、泥壁と茅葺き屋根はシェイクスピア・グローブ座の職人が手掛けるという分担作業が行われたそうです。さらには水族館も・・・。

さらに、敷地内には、植物学を学ぶ3年制の学校や、植物の分類と識別やDNA分析など科学的調査を行う研究所もあり、世界で初めて合成繊維のナイロンが創り出された研究所だそうです。

なにせ、3時間程度の入園なので、とても全部を廻るわけには・・・。少なくとも、一日は必要では？

園内散策中に、珍しいマツの仲間を見つけました。園内の表示では、ブータンパインとニュージーランドパイン。後で調べてみると、ブータンパインはヒマラヤゴヨウ、ニュージーランドパインはラジアータパインで



写真上左：ヒマラヤゴヨウ

別名 ブータンパイン

写真上右：ヒマラヤゴヨウの球果

写真右：ニュージーランドパイン

別名 ラジアータパイン、モントレーマツ

～いずれも、マツ科マツ属

した。

ヒマラヤゴヨウ。園内で目にしたときは、ここにもダイオウショウがあると思い、近づいて表示を見るとブータンパインと・・・。京大農学部植物園の入口にある建物の中庭で観られるようです。ダイオウショウと同じように、長さ10-20cmのしなやかな葉を垂らします。ダイオウショウは3葉ですが、こちらは名の通り5葉が束に・・・。ブータンパインの別名もあり、ヒマラヤ地方の原産。花は5月頃に開花し、翌年の秋に10cmほどの球果(松かさ、まつぼっくり)に育つそうです。

ニュージーランドパイン。一見、ヒマラヤゴヨウを逆さまにした感じでした。が、ヒマラヤゴヨウよりは堅い葉。日本では Monterey Pine を直訳したモントレーマツ



が標準和名として呼ばれていますが、ラジアータマツ、ラジアータパインなどと呼ばれることも多いそうです。木材の輸入先として大きなニュージーランドやチリを頭に付けたニュージーランドマツやチリーマツという表記も木材・建築業界など、一部で使われているようです。

熟した球果は明るい茶色で長さは20 cmほどにも成長するものも・・・日本では観られない大きさです。15年ほど前に訪れたニュージーランドの果物販売店の軒先で見ることがあります。驚き桃の木でした。

球果は熟しても枝からは落ちにくく、長期間枝に付いたままで開閉を繰り返します。他のマツ同様、暖かく乾燥していると開いて中の種子を散布します。熱と乾燥を同時にもたらす火災が起こると、多数の球果が開き、中に入っていた多数の種子が散布されます。ニュージーランドパインにとって火災は最高の繁殖条件？火災で最大限の数の球果が開き、しかも競合する植生は一時的ですが火災で壊滅。最高の発芽床になるそうです。

材として利用する場合、一般的には薬剤処理・加圧処理などを行い、合板などとして建築用材やコンクリートの型枠材等に・・・また、ウッドチップにしてパルプやパーティクルボードの原料として利用されているそうです。また、パーティクルボードは遮音性に優れるので、フローリングなどに使用されるなど、普段の生活の中で利用されている植物のようです。

ユリノキです。ここでは、かなり低い位置に咲いていました。通常、大きく育った樹、しかも、結構大きな葉の間に、黄緑色の小さな花をつけるので、目立たない花。葉は絆纏、花はチューリップに似ていることから別名、ハンテンボク(絆纏木)、チューリップツリーと呼ばれています。また、花が蓮の花を思わせることからレンゲボク(蓮華木)とも・・・原産地は北アメリカ。日本へは、明治時代初期に渡来したそうです。



写真上：ユリノキ(モクレン科ユリノキ属)

別名 ハンテンボク、チューリップツリー、レンゲボク

午後から明日(6月1日)の午前中は、ロンドン市内です。

バッキンガム宮殿。ご存知のように、英国王室の宮殿。内部の見学もできるようですが、今回はフェンスの外側から・・・衛兵の交代式もありましたが、ギャラリーが多く、人壁の外から背伸びしてやっと・・・正面の像は、ヴィクトリア記念碑。

ウェストミンスター寺院。英国王室の教会。ゴシック様式の代表的な建築物でユネスコの世界文化遺産(1987年)。1066年以来、歴代の王の戴冠式が執り行われた教会です。ヘンリー三世やエドワード一世とその妃たちが埋葬されているそうです。ニュートンやシェークスピアなど、イギリスの功労者も・・・最近では、ウィリアム王子とキャサリン・ミドルトンさんの結婚式も・・・

聖マーガレット教会。ウェストミンスター教会の敷地内にある教会。ユネスコ世界文化遺産(1987年)



写真上左：バッキンガム宮殿(ザ・マルにて)

写真上右：バッキンガム宮殿

写真左：聖マーガレット教会

写真下左：ウェストミンスター寺院正面

写真下右：ウェストミンスター寺院北側





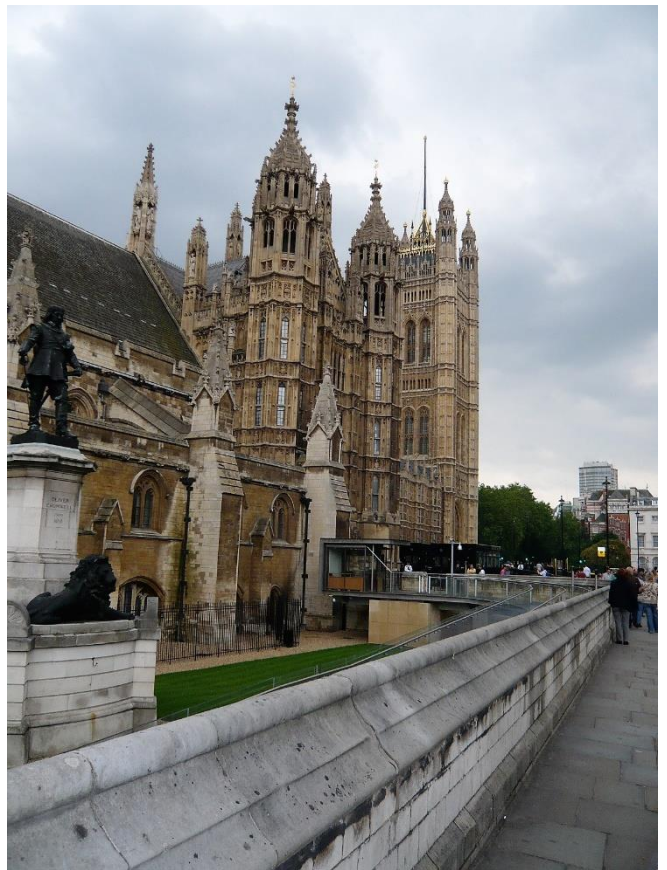
写真上左：オリバー・クロムウェルの銅像



写真上右：国会議事堂

写真下左：リチャード獅子王騎馬像

写真下右：国会議事堂



国会議事堂(ウェストミンスター宮殿)。ネオゴシック建築。1834年に大火災があり、改修して現在の姿になったとか・・・。ユネスコ世界文化遺産(1987年)。宮殿正門前には、オリバー・クロムウェルの銅像やリチャード獅子王騎馬像も・・・。建物外観は、テムズ対岸からの眺めに重点を置いた構成とか・・・。宮殿正面はテムズ川とは反対側。名物は、ビッグ・ベン。



写真上：アドミラルティ・アーチ

写真左：トラファルガー広場

アドミラルティ・アーチ。ザ・マルに通じる壮大な門。イギリス国王エドワード 7 世が、母ヴィクトリア女王を記念して建造したもので、エドワード朝時代の華麗なモニュメントです。バッキンガム宮殿へと通じるザ・マルの入口に建っています。また、アーチは、旧海軍省の建物と連結しているため、アドミラルティ（海軍）という名称が・・・。何世紀もの間、そこにはイギリス海軍の本部が置かれていたとか・・・。

トラファルガー広場。1805年のトラファルガーの海戦（スペインのトラファルガー岬の沖で行なわれた、ナポレオン戦争中、最大の海戦）勝利を記念して造られたもだそうです。その海戦で功労のあったネルソン提督の記念柱が有りました。



写真上左：ロンドン塔 / 写真上右：タワーブリッジ

ロンドン塔。ユネスコ世界文化遺産(1988年)。一時的には王室の宮廷として使われたことも・・・。しかし、牢獄や処刑の場として・・・。ここで処刑された歴史的人物は数知れないそうです。それでも、ここには、国王の即位の際使われる王冠、宝珠、王錫などの数々の宝物が展示されているそうです。

ロンドン塔のすぐ近くにあるタワーブリッジ。船が重要な交通機関だった頃は、1日に50回くらい、跳ね橋が上がっていたとか・・・。今は、運が良ければ・・・。上部には、ガラス張りの歩道橋があります。



写真上左：セント・ジェームス宮殿

写真上右：セント・ジェームス公園

写真右：ランカスターハウス&クラレンスハウス衛兵

写真下左：グレート・ジョージ通りからビッグ・ベン

写真下右：騎馬兵(ザ・マルにて)



ロンドンにある、最も古い宮殿の一つ、セント・ジェームス宮殿。ザ・マルを挟んで反対側にある公園がセント・ジェームス公園。バッキンガム宮殿からトラファルガー広場近くまで伸びている公園。静かで喧騒から離れてゆっくりできる場所でした。ここから、バッキンガム宮殿を臨むこともできました。公園内には、鳥だけではなくリスもチョコチョコ・・・。

ちなみに、セント・ジェームス・パークと言えば、現在では同名のユナイテッドFC(サッカー)のホームスタジアムの名前が・・・。



写真上左：ケンジントン公園と宮殿



写真上右：ケンジントン宮殿

ケンジントン宮殿。勿論、英国王室の宮殿。チャールズ皇太子と故ダイアナ妃の住居だった建物。現在はウィリアム王子とキャサリン妃が居住。ヴィクトリア女王も、ここで誕生されています。

ケンジントン公園の入り口付近で見かけたセイヨウトチノキです。

同行のご婦人が「トチノキね、マロニエなのよ・・・。」と教えてく

れましたが・・・。「トチノキ=マロニエ」ではなく、正確には「セイヨウトチノキ=マロニエ」、日本でよく見かけられるのは「トチノキ(学名は *Aesculus turbinata*)」。セイヨウトチノキより小型。どちらもトチノキ科トチノキ属。右下の人間(大人)と比較すれば大きさも・・・。

参考までに、トチノキの同じ仲間にヒマラヤ地方の北西部が原産のインドトチノキ(学名は *Aesculus indica*。



写真上左：セイヨウトチノキ～マロニエ(トチノキ科トチノキ属)の樹



写真上右：セイヨウトチノキ～マロニエの花

ケンジントン公園にて

英名は Indian horse chestnut)があるようです。セイヨウトチノキはよく耳にしますが、インドトチノキは・・・？ セイヨウトチノキを英名で horse-chestnut というのは、この木はクリの仲間であるという誤解と、馬の胸部疾患の治療に用いられたことに由来するそうです。

セイヨウトチノキとトチノキの見分け方は・・・。花や葉ではなかなか・・・。ですが、セイヨウトチノキの実には柔らかいトゲがあるそうです・・・。

* **第12日目～13日目 (6月1日～2日)**

午前中は、ロンドン市内へ。早いもので、今日は帰国の途へ。6月1日、ヒースロー空港 13:45(現地時間)発のブリティッシュ・エアウェイズで、成田へ(6月2日9:15着)。国内線に乗継いで伊丹 14:30着。無事帰国です。

イギリス・・・。本当に自然豊かな、また、その維持を・・・。ロンドンもしかり、有名なブランドショップも多くありましたが、緑の空間がそれ以上に・・・。かつての英国の文化を、今なお、継承している国。エコノミックな国が多い中で・・・。

ところで、今回の旅行で、最初に見かけた花、サクラとサクランボに関して・・・。以下、山形県寒河江市の、さがえ西村山農業協同組合HPからの要約ですが・・・。

果樹の専門分野では「さくらんぼの木」とは言わず、オウトウの木、桜の木と呼ぶそうです。どちらも同じバラ科サクラ属ですが・・・。「さくらんぼ」とは商品化されたものの通称(木も実も)だそうです。あくまでも概念的な区分方法ですが、以下のように区分けされているようです。

「オウトウ」・・・学術用語として使われ、木そのものや、木に成ってる実のこと。

「さくらんぼ」・・・流通するためにもぎ取られた果実のこと。

「チェリー」・・・加工品や輸入果実のこと。

では、サクラとオウトウの花の違いは？

- ・サクラの花は、一般的には白から薄紅色(いわゆる桃色)などが多く、オウトウの花は「白い花」。
- ・桜の花は、花柄が枝に直接つき、オウトウの花は、花柄が、一段・二段とくびれた上に着く。このくびれも枝の一種。
- ・サクラより、オウトウの方が、雄蕊や雌蕊が大きく、多い。

など・・・。



写真上：市内の公園にて

～ 完 ～

2017年4月5日 by SM記

備考：今回は、文章内記載以外、主に下記を参考資料として利用しています。

- ① Wikipedia、②地球の歩き方(ダイヤモンド社)